

米国教育事情視察 報告書

2001年1月16日～1月18日

参議院議員

畑 恵

目 次

はじめに 1
日程 訪問先アドレス 3
1 . UCDS (University Child Development School) 4
〔概要〕	
〔クラス構成〕	
〔視察を行なって〕	
○議会・投票	
○キング牧師への手紙	
○トイレも庭も、子どもたちが作る、変える	
○インターネット	
○オークション	
〔先生の養成、指導体制〕	
〔視察を終えて〕	
2 . Country Village Day School 10
〔概要〕	
〔クラス構成〕	
〔視察を行なって〕	
○国旗および国歌	
○おやつ	
○シェイピング・フォーム遊び	
○児童図書	
○鏡	
○シンク (盥 ?)	
○トイレ	
〔視察を終えて〕	
3 . EEU (Experimental Educational Unit , Center on Human Development and Disability , University of Washington) 18
〔概要〕	
〔クラス構成〕	
〔視察を行なって〕	

- マジックミラー
- 常に話し掛け、触れて、刺激を与え続ける
- 笑顔
- 用事を頼む
- 〔先生〕
- 〔視察を終えて〕

4 . Island Park Elementary School21

- 〔概要〕
- 〔クラス構成〕
- 〔視察を行なって〕
- ボランティア
- 校長先生
- 先生の確保
- 教室
- 〔視察を終えて〕

5 . Lakeside School26

- 〔概要〕
- 〔クラス構成〕
- 〔視察を行なって〕
- ウェルカム
- 日系の生徒が日本語で案内
- リュックがごろごろ
- 自分の意志で学ぶ（自学自習）
- 受身の授業より、意見発表型の授業が好き
- ハードな学生生活
- 〔視察を終えて〕

6 . Northwest School31

- 〔概要〕
- 〔視察を行なって〕
- Taussig 校長
- スティーブンス交際プログラム局長
- Informal だが Serious（形式張っていない、しかし真面目）
- 一校一家
- 芸術教育
- 〔視察を終えて〕

- はじめに -

今回、米国シアトルにて教育事情の視察を行なうにあたり、幼児教育から初等・中等教育まで、あわせて6つの学校を訪れた。

〔学制〕

米国では各学校、各州によって教育制度を独自に設定するため、必ずしも一律に学制を日本とは比較できないが、おおむね日本の制度と対比させると次のようになる。

《米国》	《日本》
・プレスクール（義務教育就学以前）	幼稚園年少組 or それ以前
・エレメンタリースクール キンダーガーデン＋ プライマリスクール（1年生～5年生）	幼稚園年長組（5歳児） ＋小学1年生～5年生
・ミドルスクール（6年生から8年生）	小学6年生＋中学校1,2年生
・ハイスクール（9年生から12年生）	中学校3年生＋高校1～3年

小学校から高等学校までは、1年生から12年生というように通して呼ぶ。
キンダーガーデンは、ほとんどの州では小学校に付随している。
米国では、高等学校は義務教育である。

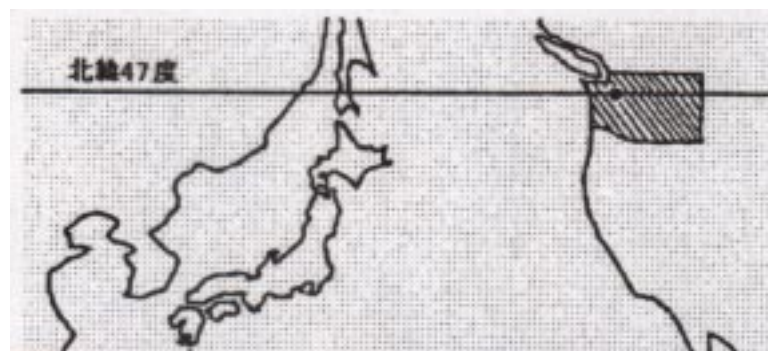


丘の上から、ダウンタウンと入り江を望む

〔シアトル概要〕

米国の北西に位置するワシントン州最大の都市シアトルは、入り江や多くの湖、河川に囲まれた風光明媚な街で、その清潔さや緑の多さから「エメラルド・シティ」とも呼ばれる。

南樺太と同じくらいの高緯度にあるにもかかわらず、海流の関係で気温は温暖で、冬の寒さは東京と大差なく、また夏は18度前後ときわめて過ごしやすい。



10月から4月は雨期にあたり、日本のように四季がある。

木材の集散加工地として発達し、今もウェアハウザー社など全米最大規模の木材会社や航空機のボーイング社などが主要企業だが、最近マイクロ・ソフト（ビル・ゲイツはシアトル出身）やアマゾン・ドットコムなどIT産業の台頭が目覚しく、フォーブス誌で全米一ビジネス・キャリアに適した都市に選ばれる。従って、所得レベル、教育・文化レベルも高く、治安も良好。

人種構成は9割方が白人だが、6%がアジア系、3.5%がアフリカ系で、全米の平均からするとヒスパニック系・黒人が少ない地域である。

〔 日 程 〕

1月16日(火): EEU (公立プレスクール) 生後6週間~5歳
Children's Hospital 子供総合病院
Lakeside School (私立ミドル&ハイスクール) 6年生~12年生

1月17日(水): UCDS (私立プレスクール) 3歳~5歳
Island Park (公立エレメンタリースクール) 5歳~5年生

1月18日(木): Country Village (私立プレスクール) 生後6週間~5歳
Northwest School (私立ミドル&ハイスクール) 6年生~12年生

〔 訪問先アドレス 〕

EEU: Experimental Educational Unit, Center on Human Development
and Disability, University of Washington, Box 357925, Seattle,
WA 98195-7925, Tel: (206)543-4011

Children's Hospital: Children's Hospital and Regional Medical Center
4800 Sand Point Way N.E., Seattle, WA 98105, Tel: (206)526-2000

Lakeside School: 14050 Children's 1st Ave. N.E., Seattle, WA 98177,
Tel: (206)368-3600

UCDS: University Child Development School, 3500 Interlake Ave.
N., Seattle, WA 98103, Tel: (206)547-2500

Island Park: Island Park Elementary School, 5437 Island Crest Way,
Mercer Island, WA 98040, Tel: (206)236-3410

Country Village: Country Village Day School, 4030 86th Ave. S.E.,
Mercer Island, WA 98040, Tel: (206)232-7107

Northwest School: 1415 Summit Street, Seattle, WA 98101,
Tel: (206)682-7309

1 . UCDS (University Child Development School)

〔概要〕

私立のプレスクール（近くにエレメンタリー・スクールも併設）。

視察を行なったのはプレスクールのみだが、近郊から優秀な児童を集め、現在の倍率は定員に対しおよそ10倍。有名人のお子さんも多く、SP付きで通っている子もいると言う。

もともとワシントン大学の二教授が、自分の理想とする幼児教育を実践する場として設立。

教育理念は、それぞれの子供たちの個性を引き出し、各々の子供達の才能を敏感に察知して、それに応じた教育を行なうこと。そのためカリキュラムは固定せず、その時々の子供達の知力や興味や疑問に応じてテーマを設定する。



登校風景。有名人のお子さんも多いので、セキュリティのため撮影は校内ではNGとのことだった。

また、原則として子供たちは年齢を問わず（3歳から5歳）一緒にクラスを行う。子供の発達はまちまちなので、年齢で分ける必要は無いという考えに基づく。

〔クラス構成〕

午前 - 1クラス17人 × 5クラス

午後 - 1クラス18人 × 4クラス

先生は一クラスに2名。マスターティーチャ - （正規の先生）とトレイニー（研修生）が一組になって、あたかも一人であるかのように指導を行なう。この学校はレジデンス制を採用しており、トレイニーはレジデンス・プログラムを受けている大学生あるいは大学院生。

ここで実践的な研修を受けた後は、勤め先の学校も紹介してもらえる。（米国では教師や医師は、学校や病院に就職するのではなく、契約を結ぶ）

〔視察を行なって〕

議会・投票

学校の玄関で案内役のダロン先生と挨拶を交わすと、彼曰く、今日ここで議会が開かれるという。

玄関は道路から若干すり鉢型にくぼんでおり、数段の階段となっている。この階段に子供達が座って、即興の議場にこの場になるとのこと。



玄関前のこの階段が、子供たちにとっての議場席となる

議題も子供達が日頃の生活の中から提議するというの

だが、イメージが浮かばないので具体例を尋ねると、例えばランチの際にリンゴを先に食べるか、それとも他のものを先に食べるかを、全員の投票で決めると言う。

議題自体は他愛も無いことではあるが、そんなことすら大人が決めたり、押し付けたりせず、子供達の主体性や意志をあくまでも尊重する姿勢と、社会生活上の問題点は何事もオープンに話し合い、その後多数決で決定するという民主主義のプロセスを、物心つくと同時に徹底的に実践とともに学ばせる教育方法に、彼我の差を痛感した。

キング牧師への手紙

あるクラスでは、子供達が壁新聞を作っていた。先生が内容を書くこともあるが、丁度壁一面に貼ってあった新聞には、それぞれの子供達からキング牧師へ宛



子供たちからキング牧師への手紙が貼り出された壁新聞、私の隣がダロン先生。

てた手紙が貼り付けられていた。ここを訪ねた日の数日前である1月15日は故キング牧師の誕生日にあたり米国では祝日となっているが、黒人への差別撤廃に死力を尽し凶弾に倒れたキング牧師は、アメリカ人にとってリンカーンと並ぶ国の英雄。

それぞれの手紙には、「人種差別撤廃のために法律を作ってくれてありがとう」といった内容が、やっと憶えたてのアルファベットをつづって書かれていて、実に感動的だった。

この学校に限らず、米国は子供たちをいわゆる子ども扱いせず、時事問題などについて情報を与え、自分で考えることを促し、周囲の人たちと論議をすることを奨励する。ちなみに今回の視察をアレンジして下さった方のお子さんの小学校では、大統領選挙中は各クラスで共和党と民主党のそれぞれ支持者に分かれて大論争と票読みが毎日行なわれ、民主党支持のお嬢さん(8歳)から論戦を仕掛けられ、ご両親はたじたじであったとか。

トイレも庭も、子供たちが作る、変える

トイレのドアを開けると、子供たちによるデコレーションがされている。左側は火をイメージした飾り付けで、右側は空気をイメージ。四大元素に対する子供たちの感性や印象が、色や形に表現されている。



外へ出ると、コンクリートの校庭に、色とりどりのペンキで、道が描かれている。この上をペイントに沿って、走ったり、歩いたり、自転車を走らせたりして遊ぶとのこと。ただし、この道は毎年卒業生が卒業制作の一つとして描いて行くので、コースは毎年変わる。あたかもそれぞれの人生のように。自分の道は自分で描くものであることを、子供たちは象徴的に学ぶのだろう。

向こうにはいささか殺風景な砂場がある。聞



くと、これも子供達が作ったもので、まず粘土でモデルを作り、それをもとにプロの庭師さんや大工さんと話し合っ
て作業を進めたとのこと。置かれている石も、子供達が集め、運んだのだそう
だ。藤棚のような棚が上につ



いた高さの違うベンチが二つある。子供たちの発達に合わせて、丁度良い大きさを子供たち自身がデザインしたと言う。

ダロン先生曰く、「子供たち自身がクリエイトすることが、なにより大切。庭を造り、道を描くことで、自分たちを取り巻く環境は、自分達で変えられるし、変えるものだということを学んでもらいたい」

日本の大人たちにこそ、学んでもらいたい一言であった。

インターネット
真新しいコンピュータ（iMacが中心！）が7台並んでいる。コンピュータ専門の指導員もおり、子供たちは3歳からインターネットにアクセスする。また併



3,4 才の子供が目にも止まらぬ速さで、マウスを操る姿には、ガク然...

設の小学校ともつながっており、サイバー空間上でも両校の子供たちが交流できるようになっている。

オークション

レゴのブロックを使って数人の子供たちが、大きな作品を作っている。これをオークションに出品するとのこと。

米国では学校や病院など、公共の施設の多くが民間の個人や企業からの寄

付によって運営されている。従って、校舎や設備・備品に至るまで、必要なものが現在の予算では工面できない場合は、随時寄付を募る。(米国でのこの種の寄付は全額、所得控除 or 損金参入される)

その最もポピュラーな方法が「オークション」で、会場に出品された子供たちの作品を親達が競り落とし、その売上がそのまま学校への寄付となる。マイクロソフトの子弟が多く通う、シアトルのある公立の小学校では、一回のオークションで4000万円近くの寄付が集まったとのこと。前述のiMacも、こうしたオークションで集まった寄付により購入したものである(指導員の費用もここから支払う)。

〔先生の養成、指導体制〕

この学校の先生にとって欠くべからざることは二点。

学校の理念を信じること

子供たちのニーズに良く耳を傾けること

先生たち同士のミーティングが頻繁に行なわれ、カリキュラムやプログラムについての情報交換を常におこなっている。

またアドミニストレーターと呼ばれるマネジメント専門の職員がいて全体のカリキュラムやプログラムを統括しており、彼らの手腕が優れていることも、現場での教育が成功していることに大きく貢献している。(当日は残念ながら、定例のミーティングでアドミニが不在のため、直接彼らから話を伺うことはできなかった)

各先生たちは、自分の担当する親たちに年2回(6月と2月)リポートを提出する。十数ページにわたる大部のもので、子供たちの成長に伴う一部始終が記載されている。

また親の方も、学校からの子供に関する質問ペーパーに詳細を記入して提出する作業を、年2回(10月と3月)行なう。



ある教室の風景.奥の黒い壁の前は、ライティングをすると舞台上に早変わりする。

〔視察を終えて〕

何事も結論や答えを最初から大人が押しつけるのではなく、まず子供たちに考えさせ、感じさせ、判断させ、実行させる、その徹底した教育方針に深く感銘を受けた。ただこうした教育指導の実現のためには、適正人数での指導体制を維持することと、スキル・熱意・理念三拍子揃った先生の育成・確保が大前提であることも痛感した。

日本で一般におこなわれている受動的で、知識詰め込み型の教育とあまりの彼我の差を感じる旨をダロン先生に伝えたと、彼は日本の学校を「水がめ」に、この学校を「工場」にたとえた。つまり日本の学校は、情報や知識を一方向的に詰め込むだけだが、このプレスクールは与えられた情報を子供たちが自分達なりに吸収し、それぞれが何かを生み出し、子供たち自身が違った製品として卒業して行く、と。

学校の信条として心に残った言葉 -

UCDS believes that learning, rather than teaching, is at the heart of education. (教育の本質とは、教えることよりも、むしろ学ぶことである)

2 . Country Village Day School

〔概要〕

私立のプレスクール。通常プレスクールというと3歳の9月から2年間だが、ここは0歳（生後6ヶ月）から受け入れる数少ない学校の一つ。

一クラスの児童数は、州で決められた定員（一クラスにいる先生の人数と部屋の広さにより児童数が制限されている）よりも少な

くおさえられ、ゆったりときめ細やかで実践的な（ハンズ・オン）教育が行なわれている。



学校の玄関

〔クラス構成〕

校内は、エントランスを中心に右サイドが0歳から2歳児のクラス（ロウークラス）、左サイドが3歳から5歳児のクラス（アップークラス）に大きく分かれている。

ほぼ6ヶ月ごとにクラス分けされているので、全体のクラスは次の通り。

・生後6ヶ月から12ヶ月	子供8人に先生3人
・生後12ヶ月から18ヶ月	子供8人に先生3人
・生後18ヶ月から2歳	子供12人に先生3人
・2歳から2歳半	子供14人に先生2人
・2歳半から3歳	子供14人に先生2人
<hr/>	
・3歳から3歳半	子供16人に先生2人
・3歳半から4歳	子供10人に先生1人
・4歳から4歳半	子供10人に先生1人
・4歳半から5歳	子供15人に先生2人
・5歳以上	子供15人に先生2人

ワシントン州の規定では、1歳以下は先生一人に対し子供4人まで、2歳から3歳までは子供7人まで、3歳以上では子供10人までと義務付けられている。州の規定では、一クラスには必ず一名のマスター・ティーチャー（資格を持った教諭）がいなくてはならず、またアシスタントの先生も最低10時間のトレーニングを受けなければならないと義務付けられている。



庭からロワークラス(0歳~2歳児)の教室を望む

クラスは通常午前9時からだが、終日（Full Day）預かりの基本スケジュールは午前6時半から午後6時まで、ただしアップークラスのみ半日（Part Day）預かりがあり、その場合午前8時45分から午前11時45分までとなっている。

料金は親の収入程度によって異なるが、基本的にはロワークラスの場合、乳児が1005\$、幼児の年少組が905\$と年長組が810\$、アップークラスは終日が700\$、半日が395\$。

親の希望によっては、延長保育も行なう。またエレメンタリースクール低学年の生徒を対象に、放課

HUNNYBEE DAILY SCHEDULE	
MORNING CENTERS	8:00 - 9:00
CIRCLE	9:15 - 9:30
BATHROOM	9:30 - 9:45
SNACK	9:45 - 10:00
SCIENCE	10:00 - 10:30
OUTSIDE	10:30 - 11:00
BATHROOM	11:00 - 11:10
STORY TIME	11:10 - 11:20
MUSIC	11:20 - 11:30
LUNCH	11:30 - 11:45
OUTSIDE	11:45 - 12:15
BATHROOM	12:15 - 12:30
NAP	12:30 - 3:00
SNACK	3:00 - 3:10
CENTERS	3:10 - 3:30
OUTSIDE	3:30 - 4:00
CENTERS	4:00 - 4:40
BATHROOM	4:40 - 4:55
SNACK	4:55 - 5:05
OUTSIDE	5:05 - 5:30
BOOKS/WIND DOWN	5:30 - 6:00

ミツバチ組の日程表

後の預かりケアも行なう。

日本のような政府からの補助金は（貧困家庭を対象としたものを除き）一切無いので、料金はいささか割高に感じられるが、実にきめ細かい指導の様子を見てみると、これくらいのレートは妥当かと感じられる。

Activity	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
Books or Stories		Deciding the story	PG Book The story	The Snowy Day	The Cold Day
Language Skills		What is the story?	What is the story?	What can I do?	What can I do?
Art Experiences		Story painting	Story painting	Story painting	Story painting
Dramatic Play		Story	Story	Story	Story
Music/Movement		Story	Story	Story	Story
Indoor/Outdoor Games		Story	Story	Story	Story
Science Activities		Story	Story	Story	Story
Food Experiences		Story	Story	Story	Story

その日具体的に各クラスで何をするかは、一週間ごとに決められ、壁に貼り出されている

〔視察を行なって〕

国旗および国歌

午前9時になるとアップパークラスの子供たちは全員、クラスごとに整列して、エントランスホールに集合する。先頭の子供が国旗を持つのだが、日替わりでそれぞれの子供たちの役割分担が色々と決められていて、クラスに当番表が張り出されている。ささいな用事でもなるだけ自分達で行なうようにさせ、また先生もできるだけ子供たちに自分の仕事を手

JOB CHART	
FLAG HOLDER:	CARLOS
LINE LEADER:	KYLE
SNACK HELPER:	(name obscured)
LUNCH HELPER:	(name obscured)
PLAYGROUND:	ALEX
SPECIAL HELPER:	(name obscured)
CLEAN UP HELPER:	(name obscured)

あるクラスの Job Chart(当番表)

旗持ち, 整列時の先頭さん, 昼食時のお手伝いなどその日の役割分担がクラス毎に貼り出されている

伝わせるよう努力している。

ホールに全員が集まると、みんなで輪を作り、まず国家に対し忠誠を誓う言葉を、先生について一緒に唱え



氷の門を模したオブジェの周りにサークルを作り、国旗を振りつつ、アップパークラスの子供たちは、国歌を斉唱

る。その後、国歌を合唱し、今日が誕生日の子供たちをみんなで祝福する。こうやってごく自然に愛国心を醸成しているからこそ、米国は強いのだということを感じさせられた。

おやつ

フルーツとビスケットとミルクのおやつタイムの様子を、3歳児のクラスで視察。さっさと食べてしまう子もいれば、食べている途中で歩き回る子、なかなか食べ終わらない子と、まさに十人十色。途中で歩き回る子は、先生が注意の上、もう一度座らせて食べ終わるよう促す。

そろそろおやつタイムは終わりだが、一向に食べ終わらない子が、二名。他の子たちは自分の皿を片付けに立ち上がり、先生は食べている子を何度かせかすが、二人はゆっくりと食べ続けている。そのうち先生は次の遊び（学習？）の準備に立ち上がるが、それでも食べ終わらない子はなおも食べつづけ、また先生もそれを中断させない。

いよいよ次の遊びがスタートする段になって、やっと先生は「もう、おしまいね」と食べるのにストップをかけると、残りを口の中に押し込んで二人は立ち上がる。

それぞれの子供のスピードや自主性をできる限り尊重してあげる、余裕のある指導振りに感心した。

シェイピング・フォーム遊び

文字通りシェイピング・フォーム（と言っても子供用の教材）の泡を使って、何か形を作ったり、人形に塗りつけたりする遊び。大人が見ても楽しそうだが、この遊びに限らず、子供たちがみんな一斉に同じ遊びをするとは限らない。

つまり同じクラスの中でも、何人かの子供はペインティングをしているが、他の子は切り紙をしていたり、ブロックで遊んでいたりと、様々。ここでも一律にプログラムを大人が押し付けず、子供たちの自主性を重んじている。

児童図書

教室に置かれている本は、その“機能別”に整理されて並べられている。つまり、勇気を奮い起こさせたい時に読む本とか、心を落ち着けたい時に読む本、眠る前に読む本などというように。



赤いエプロンをかければ、泡でどんなに遊んでも大丈夫。でも、先生の後にいる女の子は、興味はあるけれど、結局最後まで手を出さず、先生もまた強要しなかった。



鏡

この学校に限らず、幼児教育の教室には大抵、鏡が置かれている。危険防止の為、割れないアルミ板のようなもの（少なくとも



1才~1才半までの子供たちのクラス。ここにも鏡がすえつけられている。

もガラスではない)で作られている。鏡に自分の姿を映すことが様々な学習効果を生むとのことで、特に言葉のトレーニングには重要とのこと。

シンク(盥?)

これもこの学校に限らないが、幼児教育の教室には大抵、子供の背丈に合わせた高さの、ビニールたらいのようなものが置かれている。この学校では、靴下、砂、葉っぱなどが入っていたが、他の学校では水が数センチ分入っていて、子供たちは水遊びをしていた。触感を刺激して発達を促す効果があるという説明を受けた。



シンクの数、1個のものもあれば2個のものも。水を浅く張って使っている例が多かった。ここでは、くつ下が入っていた。

トイレ



ロウクラスでは、まだできない子にはトイレのトレーニングもしてくれる。トイレはすべて幼児サイズに作られているが、更に小さい子用に配置した台は、先生方のお手製。



しかもトイレの入り口には、待

っている子供たちのために小さなベンチが置かれているところに、先生達の子供たちへのさりげない優しさを実感した。

ロウクラスのトイレは、用を足しおえた子がどこかに行ってしまうように、カラフルな柵と、外には待つための低いベンチが据えられている。

〔視察を終えて〕

子供たちはどの子も一様にととても落ち着いていて、情緒的に安定している。日本のように走り回ったり、騒ぎ立てたり、ヒステリックに泣く子がまったくと言っていいほど見当たらない。

ここでの教育の賜物とも言えるが、むしろそれぞれの家庭での躾がきちんとできており、しかも親の愛情が足りている子供でなければ、先生の厳しい指導も無しに、これほどすべての子供がおとなしくはないはずだ。

ただ、クラスの雰囲気はとても穏やかで、ゆったりしており、どの先生達にも自然な笑顔の美しさと温かさが共通している。卵が先か、ニワトリが先か、日本のクラスと比較して考えさせられた。

前出の UCDS のように、子供たちの能力開発のため、ありとあらゆる手を尽くしてカリキュラムを組み、プログラムを実行する学校とはまた違った、素朴さ、ナチュラルさ、ゆったり感が魅力のプレスクールだった。



雪の結晶を形どった紙(様々な形に紙を抜くパンチャーを使って作る)を、のりで思い思いに貼ってゆく。仕上げに銀ラメの粉を振りかければ出来上がり！



一番年長さんのクラス。先生が説明してくれた知識をもとに、その際に使った天体に関する本、そしてシールやカラーマジックペンを使って、自身为天体ブック(本)を作っているところ。

3 . EEU (Experimental Educational Unit , Center on Human Development and Disability , University of Washington)

〔概要〕

ワシントン大学付属の公立プレスクール&キンダーガーデン。もともとハンディキャップ（発達障害や自閉症など）を持った子供たちのため



に設立された学校だが、健常児もともに通い一緒に学ぶ。あえてハンディのある子供と学ばせたいと

AM8:45. 子供たちが次々と登校してくる(玄関にて)
子供たちの事情もあり、校内の撮影は原則禁止

考える親がいることはもちろんだが、授業料が無料であること、3歳児からスクールバスで送迎してくれることなどもあり、定員を越える希望者がある。

学校の目指すところは、障害を持った子供やその家族の、能力や自信を高めること。子供たちのためだけでなく家族を支援するサービスがあり、カウンセリングや家庭での教育に関する指導も行なってくれる。また親を支援するネットワークがあり、特に乳児から2歳の子供たちの父親向けのプログラムがある。

〔クラス構成〕

児童数は現在、175人。

1歳半から3歳 1クラス 13人（うち健常児が2人）

3歳から5歳 1クラス 16人（うち健常児が6人）

一クラスに、マスターティチャ - 1名、アシスタント1名、更に大学院生が1 or 2名加わって指導にあたる。

〔視察を行なって〕

マジックミラー

すべての教室には、マジックミラーからクラスの様子を見学できる小部屋

がそれぞれ設置されている。実際に私達の視察中も、授業開始まもない時間帯だったということもあったろうが、ほとんど全部の教室で、数人の家族が我が子の授業の様子をこの小部屋から見守っていた。

子供を預けに来た家族は、そのまま帰ってしまわず、子供たちと一緒にクラスで必ず一定時間遊んでいくことを奨励される。大半は母親だったが、中には数名の父親も来ていた。

常に話し掛け、触れて、刺激を与え続ける

優秀だといわれる先生の動きを見ていると、とにかく一瞬として止まることなく、はっきりした明るい口調で声を掛け続け、子供たちのからだを触りつづけ、揺り動かしつつ、要するに刺激を与えつづけている。皆で歌を歌ったり、お遊戯をしたり、フラフープで遊んだり、ボールを転がしたり、とにかく短時間ずつ様々なことを、矢継ぎ早に続けて行く。

笑顔

先生も友達も家族も日頃からごく自然に接しているからなのだろうが、どの子も本当に屈託が無く、柔らかな笑顔が印象的だ。確かに他のプレスクールの子供たちより若干動作や反応が鈍い気がするが、明らかに自閉症あるいは発達障害とわかる子は数少ない。

中になんかなり重度の自閉症の子供が一人いたが、その子でさえ奇声を発したり、走り回ったりせず、また初めて見かける私たちがすぐそばでしばらくの間、彼のことを見ているとナーバスになること無く、むしろ私とアイコンタクトさえできていた。ただし、この子には必ず一人の先生がぴったりと傍について（もちろん他の子供の指導にもあたりながら）30秒に一回くらいの割合で触ったり、声をかけたり、とにかく一人で放っておくことがほとんど無かった。

用事を頼む

先生は、些細なことも（例えばボールを取ってこさせる、授業に使うノートを運ばせる、配膳を手伝わせるなど）なるたけ子供たちに仕事を依頼する。用事を頼むことで、子供たちに責任感を醸成させるわけだが、用事が済んだら必ず良く誉めてあげる、あるいは大きなアクションで感謝・ねぎらいの言葉を掛けてあげていた。

〔先生〕

マスターティーチャーあるいはアシスタント・ティーチャーのほとんどが、ワシントン大学あるいは他の大学で幼児教育学を修めた人たち。また大学院生は研修といった形で先生たちのサポートに入っており、その際に優秀だと認められ、この学校の先生に採用される人もいるとのこと。

〔視察を終えて〕

ハンディキャップの子供たちが多いと事前に伝えられていなければ、そのことに気が付かないほどごく自然な授業風景で、ある意味で通常の授業を行なっているように素人の私には感じられる。ただし、よく観察していると、何度も何度も根気強く同じことや、違うことを先生が子供たちにし続け、話し続けて、ずっと子供たちに対して何らかの刺激を与えつづけていることがわかってくる。

また自分達が教育のプロだからといって、ハンディのある子供たちを預かり切ってしまうことなく、あくまでも家族の人たちと一緒に、力を合わせて子供たちの教育にあたり、その過程で家族の人たちも多くのことを学んでいる姿に、ハンディキャップのある無しを越えて、学校教育のあるべき姿を見たような気がした。

学校の信条として心に残った言葉 -

First and Foremost (まず第一に、何より大切なことは)

Ensure that every child has a functional and appropriate way to communicate!

(すべての子供たちが、機能面で適切なコミュニケーションを確かに取れるようにすること!)



エネルギッシュかつパワフルな Annable 校長と

4 . Island Park Elementary School

[概要]

公立のエレメンタリー・スクール。マーサアイランドという場所柄か（ちなみに佐々木投手もここに住んでいる）、質の良い教育を行うということで評判の高い学校。先日も台湾の国営放送局が取材に来たとのこと。



PM2：30 過ぎ . 下校時には、車で我が子を迎えに来る親の姿も .

クラスター制（二学年が一部の授業を合同で学ぶ）を実施しているのが、最大の特徴。

[クラス構成]

- ・ 1クラスの人数 キンダーガーデン 23人
 プライマリー・スクール 26人
 （小学校1年生～5年生）
- ・ 先生の人数 2クラスを2名の先生が一組となって担当
- ・ 1学年のクラス数 4クラス

<クラスター制> （詳細は、p24「教室」の項を参照）

原則として、体育・音楽・美術以外はどの授業も二学年一緒に学ぶ機会があるそうだが、主に理科と社会で合同授業を行なうことが多い。

- ・ キンダーガーデン&1年生 合同授業
- ・ 2年生&3年生 合同授業
- ・ 4年生&5年生 合同授業

クラスター制の際は、4クラスを4名の先生が一チームとなって担当

[視察を行なって]

○ボランティア

学校の玄関を入ると、廊下左側に受付がある。窓から声を掛けると、そこに置かれたノートに名前と今の時刻を書きこむように促される。言われたとおりにすると“ボランティア・バッジ”(と言ってもワッペン)が渡され、これを胸に張ってはじめて入館が許される。

この学校に限らず、そして公立・私立を問わず、米国ではどの学校も親たちに対し、あらゆる形での学校への協力＝ボランティアを求める。学校での教育活動に対して何らかの協力を行なうことは、子どもを通わせる親の事実上「義務」であり、また子どもの親以外の市民も学校の戦略に積極的に参加している。ボランティアの内容は実に様々だが、例えば次のようなことが日常に行なわれている。

- ・授業の前に子どもたちに本を読んであげる
- ・授業で使う教材の準備を手伝う
- ・先生の書類をまとめる手伝いをする
- ・親たちへのニュースレターを作る手伝いをする
- ・図書館での仕事の手伝いをする
- ・遠足の際に参加して子どもたちと手をつないで上げる etc.

この他にも、お父さんの職場に社会見学の子どもたちを受け入れるとか、大工さんのお父さんなら木工の授業で一日指導してあげるとか、貢献の仕方はその人次第。(どうしても共稼ぎで忙しい両親は、金銭的な面でサポート)

ただボランティアだからといって、暇な時に行けばよいというのではなく学年のスタート時に学校側と親との面接があり、一週間のいつ学校に来られるか、どのような貢献が出来るかを聴取され、それで時間と内容を約束すると変更は原則としてきかないので、もし休まなければ行けない場合は、必ず代役を立てなければならない。



受付のガラス戸には、ボランティアに来る方々への注意書が貼り出されている。下の開かれたノートに名前と入退出の時刻を記載する。

とにかく子どもたちに対する教育の質の向上をはかるためには、親と学校側のスタッフがいかに固い絆で結ばれ、緊密な協力体制が作れるかが、その成否の最大の「鍵」という考え方が米国では一般的であり、非協力的な親は当然、著しく他の親たちから非難されることになる。

○校長先生

校内を視察させていただく前に、45分間くらい校長先生から学校について詳細なお話を伺う。

素晴らしい校長先生であると大変評判の高い方と聞いてきたが、まず随分とお若いことに驚く。と言うのも、米国での校長先生は、私立・公立を問わず学校のCEO・最高責任者であるとともに、親たちにとってはまさに学校の窓口そのものであって、何かあればまず校長に相談し、

苦情も意見も校長に伝え、校長自身がその問題を処理する。かなりのハードワークであるため、ある程度若くないと確かに体力的にととても務まりそうにない。

モリソン校長も、週に何度か親御さんたちへの説明会を開くそうだが、午後7時からのため帰宅はかなり遅くなるとのこと。

学校運営の統括者としての仕事がある上に、子どもたちとも密に接して、その上保護者の方たちとも始終話し合わねばならないのでは、余りにハードワーク過ぎるのではと伺ったところ、仕事は楽しくて仕方がないし、親御さんたちと教育について話し合えるのは何よりの幸せであり、喜びであるという答えが満面の笑顔で返ってきた。これぞプロ、さすが評判の校長であると感服したが、とにかく校長の対応や処理の仕方が悪いとただちに親から学校区へ苦情が入り、また親たちも校長の人柄で学校の良し悪しを判断するくらい、校長先生の存在は大きい。ひとたび校長の悪い評判が立とうものなら、翌年の入学者数にも響いてくるし、更には親が校長をクビにしてしまうケースも珍しいことではないとのことだった。

もちろん校内視察の際も、彼女が率先して案内と説明をしてくれたが、それぞれの先生方やスタッフの方に対しても、とても丁寧に温かいねぎらいの言



子供たちからも保護者の方々からも、大変評判の高いモリソン校長と

葉を必ず掛けており、人格者でなければ務まらない仕事であることを改めて知らされた。

○先生の確保

米国は日本と違い各州によって教育予算がかなり異なり、また公立学校の教職員は厳密に言って公務員ではなくその州の中の学校区ごとに採用される為、その給与は州ごと、更に学校区ごとで著しく異なる。

例えば、シカゴ（イリノイ州）にある全米トップランキングにもランクされる某有名公立高校では子供一人にかかる年間予算は 12,000 ドルなのに対し、ワシントン州でトップクラスの公立高校では 6,000 ドル。この予算の違いは教員給与の違いにそのまま現れるので、予算のある学校区には高いレベルの先生が集まり、低所得者が多く住み予算の無い学校区は先生の質を上げるのが大変難しいということになる。

この小学校の学校区でも、かつて住民が教員のレベルを上げる為に討議を重ね、教育予算のアップをはかったという経緯がある。

○教室

クラスター制を実施しているので、教室も二つの教室が一部でつながっていたり、間の壁が取り払えるようになっている。

クラスター制を行なうメリットは、二人の先生が 2 年間チームを組んで二つのクラスを担当するので、同じ子供の発達を 2 年間に亘って観察し続けることができ、また一人の先生のみでの判断だと必ずしも正しいことばかりとは限らないところを、二人で相補い合えるということがある。

ただ実際の授業編成は複雑で、例えばキンダーガーデン（K と記す）と 1 年生では、理科と社会科の時だけ間の壁を取り払って、K と 1 年の生徒がコンビとなって座り、共同あるいは一人で勉強をする。

2 年生と 3 年生では、2 年の半分と 3 年の半分とで、一クラスを作り、そのクラスとなりの一クラスでコンビを組んで、理科、社会、音楽、体育などは一緒に、ただ英語、算数、読書、書き取りなどは 2 年同士、3 年同士を集めて学年ごとに勉強する。

4 年生と 5 年生では、2 クラスは 4 年のみ、2 クラスは 5 年のみ、4 クラスが 4 - 5 年生のミックスクラスとなっていて、どちらを選ぶかは親の希望となっている。

[視察を終えて]

米国では寄付控除が広く認められているなど税制が我が国と大きく違うので、寄付が日常茶飯に行なわれているとこれまで考えてきたが、金銭ばかりでなく親や卒業生、そして一般市民からの善意・協力・ボランティアが、学校運営の基盤として組み込まれていること、そのサポート無しに運営はままならないことを痛感した。特に小学校の場合、学校を展開して行くための業務は膨大で、それぞれの子どもたちの親たちが知恵を出し合い、労力を出し合い、スキルを出し合わなければ、とても親たちが希望するような学校教育（それはもちろん先生たちも目指している教育）を実現することできない。

子どもの親たちが、学校の先生やスタッフと一丸になって理想とする教育を実現しているこの学校に、本来教育とはこうあるべきという姿を見た気がした。学校の信条として心に残った言葉 -

Parents are the first teachers of their children.

（親は自分の子どもにとって第一番目の先生である）



入り口近くの廊下の壁に飾られた卒業制作作品。子供たち一人一人の名前が色とりどりに描かれている。

5 . Lakeside School

[概要]

英才校として知られる私立のミドル&ハイスクール(5年生~12年生)。ビル・ゲイツの出身校であり、卒業生のほとんどはアイビーリーグ同等の大学進学を目指し、ワシントン州の学校ランキングでも常にトップを飾っている名門。また親からの寄付金総額が全米一になったこともある学校としても知られている。今回はハイスクールのみを視察。



瀟洒なレンガ造りの校舎とうっそうとした樹木のコントラストが美しいキャンパス

[クラス構成]

生徒数： ハイスクール 449人 ミドルスクール 256人
教職員数： 106人 (生徒/教職員 7.5 : 1)

ハイスクールの授業は、学年毎ではなく学力毎に分かれており、またいわゆる担任がいるようなクラス分けはされていない。生徒たちは大学で単位を取得するのと同様に、希望するクラスを選択し、自分自身でカリキュラムを組む。朝、授業の前に、アドバイザーと呼ばれる先生の部屋に4、5人ごと集まる以外は自分の教室といったものはなく、休み時間や空き時間などは図書館やカフェテリアなどで過ごす。大学のキャンパス・ライフとほとんど変わらないという印象を持った。

[視察を行なって]

○ウェルカム

ボストンの街並みに似合いそうなイギリス調のレンガ積み校舎に足を踏み入れると、教職員の人たち数名がにこやかに出迎えてくれる。若い校長先生が記念品(学校のロゴ入りのマグカップ)と学校のパンフレット(これまた学

校のネーム入りのリボンで飾られている！)を手渡ししながら、短いウェルカム・スピーチを送ってくださる。さすが名門でお金持ちの学校であり、いわゆるアメリカ風のフランクな歓迎とはちょっと趣が異なる。



中央のジャケット姿の男性が校長先生。その向かって右側の二人の生徒（左が Jason, 右が Asako）が校内を案内してくれた。

実はこの校長先生も、最近、全米トップの成績を誇る某ハイスクールから引き抜かれて来たとのこと。ちなみに米国では、いくつかの団体が様々な視点から学校の評価を行ない、ランキングという形で発表している。

○日系の生徒が日本語で案内

何より感激したことは、学校の案内や説明を教職員ではなく、この学校の生徒さんがしてくれたこと。それも日本語の出来る日系の生徒二名に、日本語で案内させるという、実にスマートで洒落た趣向。二人とも流暢とまでは行かない日本語だが、とにかく一生懸命にこちらの視察の目的や希望をその場で聞き出しながら、それならあっちに行こう、こっちに行った方がおもしろいと色々と案内してくれる。

生徒二人には女性のベテランの職員一名が同行しているが、彼女は日本語はわからない。基本的にどこを視察するか、子どもたちにす



只今、物理の実験中。にもかかわらずなんともフランクな授業風景！

べて任せている。日本だったらあらかじめ学校側で視察のコースを決めてしまい、訪問者が見たいところよりも学校にとって見せたいところを回ることになるのだが、この学校では、どこでも OK。授業中のクラスでも一声かければ、いきなり入っていても見学を断る教師はおらず、中には「どんな目的で来たのか」と、こちらが反対に質問を受ける場面も。

○リュックがごろごろ

自分が所属するクラスがあるわけではないので、荷物はみな自分で持っているか廊下に転がしておくか。とても清潔で、規律正しい雰囲気のある学校の中で、廊下に無造作に転がっている沢山のリュックが、学生臭さというか、アメリカらしい開放感を感じさせた。

○自分の意志で学ぶ（自学自習）

各教室を歩きながら、学校の教育方針などについて、二人の考えを聞く。ここでは勉強を強要されることは一切ないという。勉強をしたければしたいだけすればいいし、したくなければサボっていても誰も咎めない。

すべてが自分の意志で行なわれるべきことで、したがってその結果も自分の責任で受け止めなければならないことを、子どもたちは小さい頃から教えられて育ってきている。顔つきだけ見るとまだまだあどけなくて、日本の子どもたちとそんなに違っているという印象はないのだが、ひとたび話し始めるといかにしっかりとした考えを持って自立しているか、一言で言って mature(分別がある)であるかがよくわかる。

なぜあなたは勉強をするのと尋ねると「自分も色々なことに興味があってもっと色んな事を知りたいし、将来、やりたいことに向かってもっと勉強しなくちゃいけないと思うし」、それに「やっぱりよくない成績は格好悪いからとりたくないしね」と、二人で顔を見合わせて苦笑していた。

○受身の授業より、意見発表型の授業が好き

米国でも先生が一方向的に話しをして、板書を子どもたちにさせるというタイプの授業をする先生がいないわけではない。

実際この学校にも、ディベートやディスカッションより、知識を覚えることを優先する先生がいるようだが（しかも抜き打ちで質問をされるのが、生徒にとってはとても苦痛のようだ）やはり余り人気はないらしい。二人ともディスカッションを活発にさせてくれる授業が楽しいそうで、何故かと聞

くと、「それぞれの人の、自分とは違った物の考え方を聞くことが出来るから」という答えが返ってきた。「例えばね」と話してくれたのは、コロンブスについて学んだ歴史の授業でのこと。コロンブスという人物について、良い人だったと評価する生徒と悪い人だったと評価する生徒に分かれてディベートを行なったのだという。

自分の意見を上手に発表するためには、まず相手の意見に良く耳を傾けることというディベートの基本を、米国の、特に将来のリーダーとなる子どもたちは徹底的に学ぶのだということを痛感した。

○ハードな学生生活

私たちがグラウンドの横をカフェテリアまで歩いていると、他の生徒たちが別の棟の校舎へ足早に向かっている。授業の合間の休み時間は5分しかないから急がないと間に合わないのだと解説してくれる。二人も昼食を取



る時間がなくなるので、時折早弁をすることもあると言う。

週のうち二日間は1コマ45分の授業が8クラス、三日間は1コマ1時間半の授業が4クラスあるのだそうで、二人とも毎朝5時に起きて、6時半からスイミングをした後、こうした授業を受けるのだそうだ。

これが試験の時期になると、何本もエッセイ（レポート）を書かなければならなかったり、テストがあったりで、「寝る時間が全然なくなっちゃうんだ」とこぼしていた。

[視察を終えて]

超難関の受験校だから大変なプレッシャーのもとで子どもたちは学校生活を送っていると聞かされてきたが、とにかく二人の表情は実に爽やかで、いきいきとしており、日本のように変なストレスがかかっていないことを実感した。二人とも職員の人そばにいてもまったく気にすることなく、自分たちなりの先生に対する評価を初対面の私に率直に語ってくれたし、その言葉はすべて自

分自身の価値観や感受性から発せられていて、説得力があった。

英才校といっても決して知識詰め込み型ではなく、むしろ将来のリーダーを育成し輩出するという意味から、自分自身の頭で考える力や、自分の考えを他者に伝え相手を説得する力を身につけることを第一義と位置付けた教育を実践している。

勉強すること、学ぶことは、つまり「知の探求」であり、もともととても楽しくて、ワクワクすることだということを、この学校の授業なら確かに感じると確信するとともに、もう一度子どもに戻ってこういう学校で学び直したいと心から思った。



ビル・ゲイツが高校時代に使ったという初期のコンピュータ。レンタルした機械をわざと壊して、「これ壊れているから」と業者に申し出ては、代金をタダにしていたというエピソードが展示コーナーで紹介されていた。

6 . Northwest School

[概要]

私立のミドル&ハイスクール。Lakeside School に次ぐ高い偏差値レベルと評価を得ている学校。

ただ特徴的なことは、アート、芸術教育に重きを置いた授業を行なっていること、また外国から（特にアジア）積極的に生徒を受け入れる体制を取っており、私立でありながら ESL も用意されている（通常米国では、ESL は公立学校



ヨーロッパ調の意匠をこらした建物の多いシアトルでも、ひととき目を引く、芸術性と伝統を感じさせる校舎。

に設置し、世界からアメリカに来る家族や子供のために英語教育を行なうことが義務付けられている）。校舎の向い側に、ドミトリーも併設。

このハイスクールでは、実に全校生徒の 25% が海外からの生徒である。

本来、公立の仕事とされる ESL をあえて実施している理由としては、この学校の哲学として、人種や宗教などの“多様性”を学ぶことを最も重要と位置付けていることに加え、外国からの生徒を多数受け入れていること自体がイメージアップになり宣伝効果があること、授業料のアップを期待できること、夏休みを利用して生徒たちが外国にホームステイや旅行をするプログラムに活用できることなどメリットは多く、実際、外国からの生徒数を増やしたことによって、一時は入学希望者数が減少し低迷していた学校の経営状況が好転したという実績がある。

二年ほど前にカリキュラムが優れていることで、ブルーリボン賞という米国では大変栄誉ある賞を獲得している。

生徒数 400 人（ミドルスクール 120 人 ハイスクール 280 人）

[視察を行なって]

○Taussig 校長

校内の視察の前に、校長先生とのミーティング。創立者の一人である Taussig 校長は、にこやかながら眼光に鋭く、厳しいものを感じさせる人。やはり理念を具現化し更に経営的に成功を維持するためには、言葉や思いだけでは無理なのだろう。

時間が無いので話は手短にとおっしゃりながら、学校の教育方針や理念を語り出すと止まらない。学習することが大好きになる教育を行なうために、子供たちにはまず「自分はなぜ勉強しなければならないのか」を自問自答させることが大切とのことだった。

お会いしてすぐに学校のパンフレットを渡されたが、その一番上にハイスクールのランキング表のコピーが載せられていた。(ワシントン大学のランキングでは Lakeside を抜いて第二位、一般のランキングでは第三位。因みに Lakeside が一位) それだけ自分の学校に対する誇りを高く持ち、日々情熱を傾注して理想とする教育を実践しているということだろう。1980 年創立という学校が、歴史を重ねた名門校と肩を並べるためには、どれだけの努力があったかしのばれる。

○スティーブンス交際プログラム局長

学校の国際交流業務を取り仕切るスティーブンスさんも、かつては家族でマレーシアから移民してきたというアジア系米国人。バリバリのキャリアウーマンといった感じで、流暢な英語でエネルギーに説明してくれるが、そのテンションの高さと話のスピードに英語力の問題もあって乗り切れない私は、どうやらはじめの内、「煮え切らない日本人」と彼女の目に映ったらしい。

しばらく話す間にその誤解は解けた(と思う)が、彼女曰く、「日本人の生徒は一律に頭は良いのだが、自分の意見や考えを表現し伝える力に劣る。夏休み期間中、ホームステイによる短期間留学の子供たちも受け入れているが、正直言って数ヶ月ここで学んだからといって、英語の上達にはさほど効果は無い。むしろ物の考え方やその考えをもとにしたコミュニケーションの方法を、身をもって学ぶことに意味がある。」

素晴らしい教育方針なので、是非私の学校からも留学生を送りたいがと話し出すと、「あなたの学校ではどのような目的、どのようなポリシーのもとに留

学プログラムを開設しているのか、まずその詳細を伝えてもらい、趣旨がわが校のそれと合い入れるものであれば受け入れられるが、さもなければ...」と機関銃のような問いかけに、当方はタジタジ。「とにかく担当者から詳細はメールにて送らせるが、基本的なフィロソフィーや学習目的、教育方針は、とても近いものがある」と答えてきた。(担当者の方、後は宜しく願います！)

○Informal だが Serious (形式張っていない、しかし真面目)

校長先生が挨拶の際、開口一番「わが校の生徒たちは Informal (形式ばっていない) だけど、とても Serious (真面目) です。ただ最初に校内をご覧になった瞬間は、Informal 過ぎて驚かれるかもしれません」と言われたが、確かにその言葉通り、校内の広い廊下ではライブハウスの演奏を待ってたむろしている若者のような雰囲気、生徒たちが思い思いに時間を過ごしている。

もう授業時間も終わりかけで、放課後の空気だったせいもあるが、地べたに坐ってギターを爪弾く子、本を読んでいる子、友達とじゃれあって談笑している子、何かの模型を囲んで議論をしている子など、様々。廊下の脇に固められてはいるが、大きなリュックが地面に転がっている風景は、もちろんここも同じ。

○一校一家

この学校では生徒たちは一緒に食事を取り、一緒に校舎を掃除する。「あたかも一つの家族のように」と校長から紹介の言葉があったので、「我が校(作新学院)でも一校一家という同様の教育方針がある」と伝えた。

ちなみに米国の学校では、自分たちで校舎の掃除をするところは稀で、大抵は専門の業者に頼んでいる。廊下のすみに置かれた箒や塵取りが新鮮に感じられた。

○芸術教育

午後 3 時を過ぎてから校内の視察を行なったので、どの教室でも芸術教育の授業が行なわれている。ここではアカデミックの授業が終わる午後 2 時からの二時限が芸術のクラスとなっている。一年に二単位修得することが義務付けられている。

素描やコーラスといった日本と変わらないものもあるが、編物・織物(ノー

スウェスト・インディアンの編み方も習う) やダンス (この地方に伝わるフォークダンスをシアトル芸術団体会員のプロのダンサーが指導してくれる) 演劇 (自分たちで創作したシャレた寸劇を披露してくれた) 更にはジャズ演奏 (なかなかの腕前で、格好良かった!) などなど、そのバラエティと質の高さに脱帽。良い指導者を数多く集めていることがよく理解できた。



校内の広い階段の踊り場を生徒達のアート作品を展示するスペースとして活用している。反ナチスの思いを表現した作品の数々。



反ナチス展の作品の一つ。アウシュビッツの収容所での残虐行為への思いを、様々な表現方法で形にしている。

[視察を終えて]

丁度、アートの授業を参観したこともあるかもしれないが、とにかく一人一人の生徒が伸びやかで、自立していることを肌で感じた。一つの人格がそこにあるという存在感をそれぞれの生徒が漂わせていて、良い意味でとても大人の雰囲気があり、何か自分のほうが気後れする場面さえあった。

学校の信条として心に残った言葉 -

The education is to find pleasure in right thing. (by Plato)

(教育とは、正しいことの中に喜びを見出すことである by プラトン)